

財団だより

多摩川

1981. 3. 第9号



清流にすむウルマーシマトビケラ



春浅い玉川上水（三鷹市井の頭5丁目目・榎本幸郎撮影）

■ 多摩の地名 ■

① 多摩の語源

多摩とか多摩川という地名や川の名が、すでに奈良時代にできた『万葉集』の中の歌に詠まれている。それは一千三百年以上も前から、この土地に住んだ人々が、そうよんできているのである。

地名とか川や山の名などは、そこに住む人々が必要があったよんだものが、多くの人々に承認されて、いつか定着したものが多いのであろう。

では「多摩」の語源はどこにあるのであろうか。すでに江戸時代からいろいろの説が出ているが、いまだにこれという定説はない。それは多摩という地名が、悠遠の昔に成立していて、その意味がさだかにとらえがたいことに起因しているのである。

この「多摩」が、「多摩川」という大きな川が流れている地域だから「多摩」とよんだのか、また「多摩」という地域

を貫流しているから「多摩川」とつけたのか明らかでない。ただ注意されるのは、多摩川沿岸には、下流から水源地の奥多摩町や檜原村まで、石器時代とくに縄文式文化の遺跡が発見されることである。このことは、多摩川沿岸に年久しく住みついた人々には、いろいろと生活の上に多摩川が強く影響していたはずで、「多摩川」という川の名が先につけられ、それがその周辺の土地をさす地名となり、さらに広い「多摩郡」に広がったと見るべきではないだろうか。つまり川の名が先にあると、郡の名があとにつけられたということである。

では「多摩川」の「多摩」とはどういう意味であらうか。

（次回続く）

（多摩の地名・保坂芳春・1979・武蔵郷土史刊行会）

多摩川散歩

●水枯れの玉川上水に悲しみをこめて——

風はまだ冷たい。が、上水の土手にはウブ毛をつけたモチ草が武蔵野に春の訪れを告げている。

前回ご紹介した小平よりずっと下流に足を運ぶ。井の頭線・久我山で下車，小金井街道を南に向けて15分程の牟礼橋から，上水に沿った小道を井の頭通りまで，上流に向かって歩いてみる。

上流といってもこの辺りでは今や水流は無いに等しい。十数年前まで「人喰川」と恐れられていた激流も，こう枯れ果ててみれば憐れ，悲しい。

こちらの上水は右に左にカーブが連続する。ほぼ平坦な勾配の少ない台地に通水するため，丘陵の尾根部を伝わって開削したという。後々の分水にも利点があった。先人の知恵を改めて思う。

歩きながら考える。巨大地震がやって来て，東京も被害を免れまいという。その時先づ問題は水であろう。地震でこの上水も崩落箇所が生じようが，水道鉄管やポンプ場の損壊と異り，取水口の羽村から多摩川の水を送れば，まがりなりにも世田谷，新宿，渋谷等まで水が届くはずだ。三百余年前の江戸時代の人が，昭和の都民何万，何十万人を救ってくれることも十分考えられる。

明暦の大火(1657)で灰燼に帰した江戸で区画整理が行われ，神田連雀町，芝西久保，吉祥寺門前町等の住民が，この辺りに移住して開村，新田を開いた。今もその江戸の町名を使う所が多い。が，この上水の存在は，兩岸農民のゆき来に大きな障害であった。江戸時代，この辺りの橋は，ドンドン橋と呼ばれた牟礼橋，井之頭弁財天詣りの人の

榎本幸郎

ための井の頭橋，鎌倉みちの一つといわれる道にかかる万助橋くらいであったようだ。大正から昭和へかけて，長兵衛橋，東橋，宮下橋，新橋が架けられたが，昭和13年に幸橋が架けられて以来途絶えた。35年ぶりにはたる橋，若草橋，まつかけ橋が何れも歩行者専用で架けられた。その橋名には緑を，自然を求める都民の願いがこもる。

私は子供の頃，よくこの上水で魚を釣った。が飲料用水路と落ちたら危いと，当時釣はご法度だった。が子供にはそんな理屈は判らない。川にいる魚を釣ってどこが悪いと，悪童仲間と，水番つまり巡視人の目をかすめて釣ったものだ。私の父や叔父達は子供の頃，泳ぎまでやったそうだ。

近くの井の頭公園池は，玉川上水が開削されるまで江戸の重要な飲料水であった神田上水の水源地で，豊富な湧水は，20年程前まで，動力揚水され，上水に注がれ，都民の飲料水の一部となっていた。が目茶苦茶な地下水の汲上げで遂に湧水が止ってしまった。地の底までも破壊する恐ろしい人間の所業である。今や井の頭池は昔日の面影なく濁りきっている。昔は上水へ水を上げたのだから，今度はこの池へお返し水をもらおうと運動があるが，肝心の上水自体が，東京の慢性的水不足を理由に枯れたも同然の今日，一向実現しない。

水面のない上水に名状しがたい，もの悲しさを世のうつろいを感じる。しかし，あと1ヶ月，上水べりに残る山桜の老木は，今年も美しい花をつけるであろう。(郷土史家)

<井の頭池周辺図>



私と多摩川



調布堰と洗剤の泡
(左にある建物は水道のポンプ場、1970年1月撮影)

中学校までを郷里の武生市で、高等学校を金沢市で過した私にとって、東京については、写真で見たり新聞、本などの文字を通じて知りうる程度の認識しかなかった。TVが映像を全国のどんな田舎にも時々刻々と送り出している現在とは比較にならない情報過少の時代であったからである。首都である東京についてさえ、その程度の認識であったから、多摩川が存在などは名前すら知らなかったのである。

昭和12年に大学に入り、始めて東京での生活がはじまった。そして多摩川との最初の出合いは、上水道の講義を補足するために行なわれた玉川浄水場の見学行の折であった。東横線の田園調布駅で下車し、放射状の街路を歩いて浄水場へ三三五五、思い思いのグループごとに到着した。田園調布は東京で最高の郊外住宅地であり、有名人の表札を見ながら歩いていると歩くのも苦にならなかった。

調布堰で多摩川から取り入れられた河水はポンプで高台にある玉川浄水場に送られ、ここで沈殿と砂汙過を受けてから、再びポンプで渋谷方面に送り出されていた。その当時の多摩川の水はきれいであったから緩速砂汙過法が用いられていたのである。

石橋多聞

戦後に再び多摩川との出合いがあったのは昭和40年代に入ってからである。多摩川の汚濁の進行が指摘されると共に、玉川浄水場の系統の水道水を飲む学童にカシン・ベック病が軽症ではあるが出現率が高いという指摘が一部の研究者により行なわれ、新聞報道が世人の不安をかき立てた。

多摩川の水は、その中流部の宅地化が進むにつれて汚濁され、下流部に位置する調布堰の付近ではかつての清流の面影は消えうせ、下水化により色も黒ずんで、洗剤による泡が風で吹き散らされていた。その当時、浄水場では塩素による消毒を強化し、活性炭によって洗剤や臭味を除いていて、そのための薬品費が年々かさんでいた。その当時私は東大の都市工学科にて上水道の講座を担当していたが、東京都水道局に設けられた多摩川調査委員会の委員長を仰せつかった。各種の資料を詳しく検討して行くと、多摩川の汚濁の原因は工場廃水よりもむしろ生活排水によるものが大きく、三多摩地区の急速な都市化が元兇であることが明らかとなった。しかも下水道の普及は急速には望めないで、多摩川の水質が良くなる見通しはうすかった。その後、玉川浄水場は閉鎖され、これが受持っていた給水量は、利根川からの水を導入することにより代替された。

多摩川が都民から見放された第1号の事件が玉川浄水場の閉鎖であった。上水道の水源である河川は水質の維持に関係者が懸命になるが、水源のない河川は単なる下水の放流用と見なされ、汚すに任かされる例が多い。

下水道事業が急ピッチで行なわれているから、次第に多摩川の水質も改善されるだろう。そして再び水道水源として調布堰が役立つ日がくることを念じている

(山梨大学教授)

よみがえ

甦れ！多摩川

●多摩川流域環境保全対策に
関する報告（水質保全）

昨年の暮、環境庁から一冊の報告書が出された。わずか15ページにすぎない報告書は、表題のような長いタイトルで、多摩川の水質保全対策に関する内容が簡潔にまとめられてあった。この報告者は、「多摩川流域環境保全対策連絡会議」の水質保全分科会というところで、多摩川流域の環境保全を図るにあたって関連する国、自治体などの関係行政機関が相互に連絡協議を行い、総合的かつ計画的に対策の推進を行なおうとする事が目的の会議である。そして、その事務局は環境庁である。

報告書の内容を概略まとめてみると、まず、最近の多摩川の水質の状況について、排水規制、下水道の整備などにより、下流部（調布堰より河口）の水質は著しく改善されたとしているが、中流部の悪化が進み、環境基準を大幅に上まわっている事を指摘している。そして、今後、水質保全を図るための対策として、

(1)当面促進、強化を図るべき施策。

- ① 下水道の整備
- ② 三次処理の導入
- ③ 排水規制の強化
- ④ し尿浄化槽の設置及び維持管理の適正化
- ⑤ 生活雑排水対策の推進
- ⑥ 汚泥しゅんせつ等の推進
- ⑦ 下水汚泥等の処分地の確保及び適正処理の推進
- ⑧ 河川美化運動の推進

(2)今後長期的観点から検討すべき事項

- ① 水環境管理システムの確立
- ② 流況改善と水資源の開発、有効利用
- ③ 河川浄化機能の強化に関する調査、研究

の推進

- ④ 望ましい水域環境のあり方
- ⑤ 土地利用の適正化

などが挙げられている。

この連絡会議には、水質保全分科会の他に、自然環境保全分科会があり、二つの観点から多摩川流域の環境保全を検討しようとしている。環境庁、厚生省、通産省、建設省、東京都、神奈川県、川崎市、その他流域の地方公共団体と学識経験者数名によって構成されて以来5年目を迎え、ひとつの区切りとして、この報告書が出されたわけである。ひとつの河川の環境保全の目的のために、このような会議が持たれるのは、日本でははじめてのことであり、重要な意義を持つものである。つまり、さまざまに機能分化された川の役割りと、それぞれに異なる管理者をひとつのテーブルにつかせ、総合的かつ合理的に対策を講じようとするわけだから、多摩川を甦らせるためのプロジェクトチームみたいなものである。さらには、従来までの川に対する考え方とは違い、川の立場に立って対策を検討していこうとする点が注目される。

財団が1978年に発行した「多摩川 '78」でも紹介したが、イギリスのテムズ川では、川を総合的に管理するため、強力な権限を持った「テムズ川管理庁」が、やはり5年程前に発足している。この管理庁は、統一的な管理はむろん、取水や排水、漁業、レクリエーションなど、川及び水に関するほとんどの権限を有する機関で、この管理庁の設立でテムズ川の管理が極めてスムーズに行くようになったといわれる。

多摩川の環境保全のために生まれた連絡会議は、まだまだテムズ川のようにはいかないまでも、いずれは多摩川を総合的に管理できるような組織にまで成長してもらいたいものである。国情、河川のスケールは違うにせよ、同じ都市河川という宿命を背負っている立場は同じであろうから。

財団の事業紹介

1. 〈研究助成〉

学術研究助成は、研究課題59件に助成金を交付し、22件の研究成果を第1巻から第3巻に取りまとめ、「助成集報」と銘名し、多摩川の環境浄化に関係の深い行政機関に贈呈し、ご活用いただいております。

〈贈呈先〉

東京都公害研究所資料室
 東京都多摩公害事務所・水質保全課
 東京都環境保全局総務部・相談課
 川崎市公害局・調査課
 通産省図書館外1部
 工業技術院図書館
 建設省京浜工事事務所外2部
 環境庁国立公害研究所外3部
 財団法人東京市政調査会資料室

2. 〈研究助成〉

1980年9月発行第7号財団だより「多摩川」で、すでに紹介済みの、一般研究助成（草の根研究助成）の成果「多摩川環境調査助成集・第1巻」は多摩川流域及び流域外の下記図書館・教育委員会資料室に、財団は寄贈いたしました。ご利用下さい。

○多摩川流域内

〈教育委員会資料室〉

青梅市教育委員会
 八王子市教育委員会
 都教育委員会多摩教育事務所
 都教育委員会西多摩支所
 福生市教育委員会
 日野市教育委員会

国立市教育委員会
 小金井市教育委員会
 都立教育研究所三鷹分室図書室
 稲城市教育委員会
 世田谷区教育委員会
 大田区教育委員会
 川崎市教育研究所資料室
 川崎市教育委員会

〈図書館〉

高尾自然科学博物館
 奥多摩町立奥多摩図書館
 都立青梅図書館
 五日市町立五日市図書館
 秋川市立中央図書館
 羽村町立図書館
 瑞穂町立図書館
 福生市民図書館
 昭島市民図書館
 都立立川図書館
 立川市立図書館
 日野市立図書館
 府中市立図書館
 くにたち中央図書館
 小金井市立図書館
 多摩市立図書館
 稲城市立図書館
 調布市立図書館中央館
 狛江市立図書館
 県立川崎図書館
 大田区立池上図書館
 川崎市立多摩図書館
 川崎市立高津図書館
 川崎市立中原図書館

○多摩川流域外

〈教育委員会資料室〉

清瀬市教育委員会
東久留米市教育委員会
都立教育研究所資料室
都立教育研究所調査普及部調査普及室

〈図書館〉

都立日比谷図書館
都立中央図書館
都立江東図書館
清瀬市立中央図書館

多摩川流域外の教育委員会資料室は東京都教育委員会を通じて強い要望がありましたのでそれに答えたものです。

流域外の図書館は、広く都民の方々がご利用されるので、贈呈いたしました。

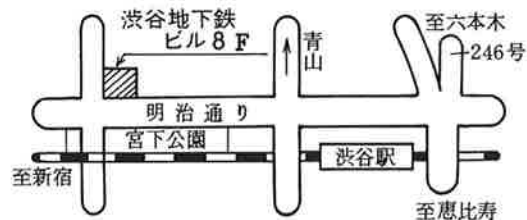
第1巻は研究課題8件ですが、現在、財団は26件（前記8件を含む）に研究助成金を交付し、調査・研究が完了・・・成果が整い次第第2巻、3巻・・・と上記施設に寄贈してゆくつもりです。ご閲覧ご利用されるばかりでなく、多摩川の問題を調べたい。究めたいと思う方は、個人でもグループでも結構ですので財団にお問合せ下さい。

〈多摩川雑感〉

2月11日の夜、NHK TVのドキュメンタリー番組で、多摩川に棲みついたベットの小鳥の生態が放映されていた。過去何十万羽と輸入されたアフリカや東南アジアの鳥が、飼い主の手元から逃げだし、とうとう多摩川の川原に棲みつき、厳しい自然環境の中で生きていく姿を映し出していた。都市部に近い逃げ場としては多摩川の川原しかないという事でかなりの種類と数には少々驚かされた。しかし、冬の寒さや習性の違いで、どれくらい生

き残る事ができるかは疑問だとされている。万一運良く適応し、世代交代ができたとしても、一方では川原の自然が少なくなっていく事もかなり影響している。こうした外来の鳥が野生化して、多摩川の川原に棲みつく事が、はたして良い事かどうかはわからないが、植物の世界と同じように、野鳥の世界も、いまや外来の小鳥が気づかないうちに侵入している事は事実である。

- ・発行日 昭和56年3月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125